オープンアクセスウィークとは

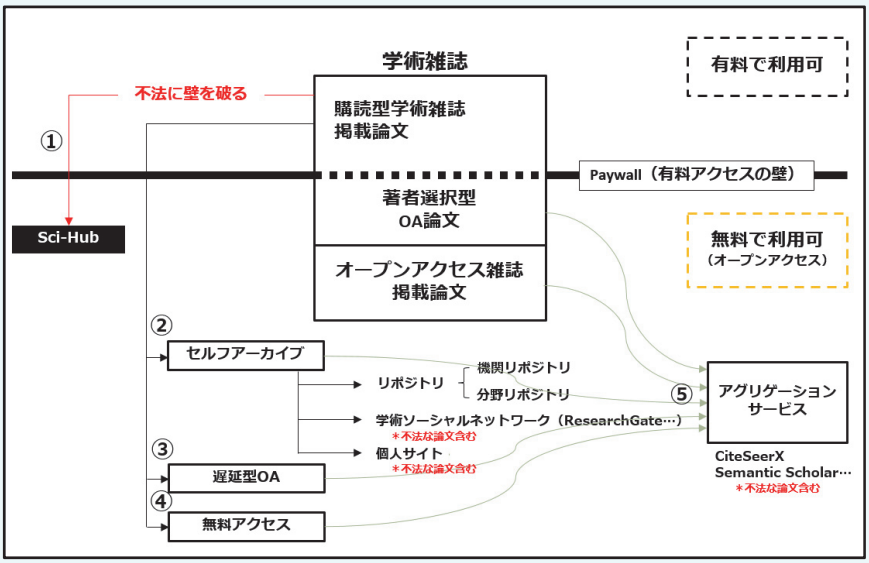
オープンアクセスウィークは、毎年 10 月に、世界各地でオープンアクセス（以下、OA）に関連するイベントを開催する取り組みです。今年のテーマは“Open for whom? Equity in open knowledge”（誰のためのオープン化？オープンな知識における平等を考えよう）。環境や言語などの壁を越えた知識共有の平等性を考えます。

オープンアクセスとは

OAは、インターネットを通じて**教育・研究活動の成果を無償で公開**し世界中の人々に**障壁のないアクセスを提供**することをいいます。誰もが分け隔てなく学術成果を共有し、学術研究の更なる発展を促すため、OAの推進は世界中に広がっています。

OAの背景には、**学術雑誌の価格高騰**という事情があります。限られた予算では、高騰する雑誌の購読を維持できないため、研究者にとっては読める論文が減少する事態を招き、また論文著者の立場から見ると、自分の論文が読まれなくなってしまうことを意味します。研究者はこのような状況を踏まえ、研究成果が適切に伝わるよう、発表方法を考える必要があります。

OAは国の政策でも推進されており、**科研費・JST・AMED** といった公的な研究助成プログラムや機関では、その助成により行われた研究の成果論文等をOAにするよう、研究者に求めています。



学術雑誌の可読性
（JUSTICE：大学図書館コンソーシアム連合事務局作成）

論文をオープンアクセスにするには

OAを実現する手段には、グリーンロードとゴールドロードと呼ばれる二つの方法があります。

■方法 1：グリーンロード（雑誌に掲載された論文を自ら公開：セルフアーカイブ）

セルフアーカイブとは、学術雑誌に投稿した論文を、機関リポジトリ等を通じてOAにする方法で、各出版社では様々な条件の下に、このセルフアーカイブを認めています。

滋賀医科大学では機関リポジトリ「びわ庫」をセルフアーカイブのプラットフォームとして運用しています。公開条件の確認など、登録に関する手続きは全て図書館で行っています。詳細は p.4 をご覧ください。

お金がかからない

■方法 2：ゴールドロード（OA誌への投稿）

OA誌に投稿・掲載することで、出版社のサイトから「誰でも・いつでも・どこでも」論文を閲覧できます。OA誌は著者からの APC（Article Processing Charge＝論文出版加工料）を主な収入源としています。

お金がかかる

研究者編

オープンアクセスについて聞きました！

研究者のためのオープンアクセス

神経難病研究センター　森　雅樹

業績としての研究論文

研究者は、社会、所属機関、政府などから「成果」を求められます。その成果に基づき、研究資金を獲得し、研究を続けて行かなければなりません。成果の端的なものが論文業績です。業績として認められるには、例えば PubMed に収載される、一定の信頼基準を満たした学術雑誌からその論文を発表する必要があります。国際学術論文は容易には受理されず、審査を含めた投稿プロセスは、一般的にいって、厳しく苦難の伴うものになります。研究者は自分たちの論文を発表する雑誌を選びます。そのときの選定基準になるのは、雑誌が扱う研究領域のほか、雑誌のグレードです。他の研究者の論文を読むときも、どの雑誌かを考慮に入れます。この選定基準に「その雑誌がオープンアクセス (OA) かどうか?」 を含めることは個人的にはこれまであまりしてきませんでした。

論文のオープンアクセス (OA)化

オープンアクセス雑誌は、研究者視点では、掲載料 (article processing charge, APC) を支払う代わりに、すべての利用者に無料で、発表した論文を読んでもらえます。滋賀医科大学の図書館では多くの学術雑誌を購読して下さっていますが、カバーし切れない雑誌も当然あります。そのような雑誌から論文を発表した場合、その論文は研究者個人が対価を支払って読むことになります。そのような論文は一般的に言ってアクセスしづらい＝読んでもらえないので、被引用回数は減少するでしょう。逆に、OA にすればより簡便に読んでもらえて被引用回数が増えるというメリットがあります。

APC を支払って OA にするオプションを選択するケースでは、限られた研究費では困難な場合もあります。OA の選択については、日本学術振興会は推奨を明示していますが、それが確実に可能になるような経済的支援の裏付けが必要だと思います。

OA 化は、個人レベルでも可能です。例えば滋賀医科大学の機関リポジトリ「びわ庫」を活用したり、セルフアーカイブを通じて自分の論文に無料でアクセスできるようにする道筋があります。また、アメリカ NIH のグラントを受けた研究論文は、PMC を通じて無料で読めますが、類似のしくみが国内に作られればより広く論文にアクセスできるようになると考えられます。

フィールドレベルの対処

昨今、有力な雑誌出版社による購読料の急速な値上げの結果、多くの研究機関の図書館で、雑誌購読が維持できないと聞いています。研究者にとっては、研究機関では図書館を通じて論文を自由に読めるので、購読料を自分の問題として捉えにくい側面があります。滋賀医科大学では、当然のごとく多くの論文が読めますが、これは当然のことではなく、雑誌購読に注力しない研究機関では、広く学術雑誌を読めないところもあります。また、日本ほど裕福でない国ではさらに事情が困難になる格差が存在します。現在は当たり前に読んでいる雑誌にアクセスできなくなるという状況は近づいていると言わざるを得ません。

そのような情勢の中、人工知能 (AI) 研究者は、特定の有力出版社の雑誌での論文投稿を避け、コストのかからない論文発表の場を模索する動きを示しています。研究フィールド単位では、このような解決策もありえそうです。

また、雑誌社が営利団体であるか PLOS などの非営利団体であるかという視点に基づき、非営利団体を守り維持するために、積極的に投稿するという向きもヨーロッパなどではあるようですが、日本ではそのような動きは目立ちません。

個人レベルの対処

現実的には、論文を投稿・発表する研究者自身は、論文が受理されるところまでが精一杯で、そのあとのことはなかなか考えられないという状況もあります。しかし、それだけだと良心的な雑誌社や利便性の高い論文アクセスが失われてしまうのかも知れません。また、論文のアクセプトまでで手一杯という状況では、日頃お世話になっている図書館を窮地に追い込んでしまうことになり兼ねないのかも知れません。長期的な視野に立ち、セルフアーカイブを積極活用して自身の論文を OA にしたり、良心的な雑誌社を活用したりすることをしないと、経済力がなくては研究できないという状況に拍車がかかるのかも知れません。

このオープンアクセス・ウィークを、どうすれば世界の研究者から発表される論文に利便性高くアクセスでき、自らの論文が広く読んでもらえる状況が作れるか、考える機会にしたいと思います。

URA編

オープンアクセスについて聞きました！

オープンアクセスからオープンサイエンスへ ―プレプリント・サーバーとデータ管理計画

研究戦略推進室 URA 松浦 孝範

私が初めて「オープンアクセス」という言葉を耳にしたのは、大阪大学で開催された「知のオープンアクセス」カフェ[1] (2010 年 10 月 20 日) と記憶している。当時のフライヤーには、「雑誌論文，電子ジャーナルはなぜ読める/読めない?」「学術・科学コミュニケーションって?」「研究者自身の，大学の情報発信はいまどんなふうに?」「情報の入手は?」「なぜ，何を，オープンアクセスにするのか?」「学問領域による違いは?」といった論点が記されている。例えば「何を」に関しては、論文だけではなく研究データなどのオープン化を進め、社会に対する研究プロセスの透明化や学界、産業界、市民などの協働による研究成果の幅広い活用を目指す「オープンサイエンス」の流れに繋がっている。2010 年といえば、オープンアクセスウィークのルーツとされる「National Day of Action for Open Access (アメリカ, 2007 年 2 月 15 日)」から 3 年。この頃から「オープンアクセスという概念は、『単に論文を無償で公開すること』だけではないのではないか」という議論が生じていたことは興味深い。

論文のオープンアクセス化については、著者が出版社に掲載料 (Article Processing Charge; APC) を支払うことで当該論文の即時オープンアクセスを可能とする方法や、研究者が所属する機関のリポジトリ (本学では「びわ庫」[2]) で研究成果を公開する方法がある。後者の詳細は、次ページを参照戴きたい。

また、最近では「bioRxiv[3]」のような、査読前の論文を公開できるサービスも普及しつつある。いわゆる「プレプリント・サーバー」と呼ばれるもので、1991 年にサービスを開始し物理分野で広く普及している arXiv の生命科学分野版だ。研究者の中には、査読前の論文を公開する点で「他の研究者が自身の研究として盗用し論文発表するのではないか」「査読のある雑誌に投稿できなくなるのではないか」などの懸念を持たれる方がいらっしゃるかもしれない。しかし、プレプリント・サーバーでの公表を以て先取権を認められるため「査読が長引いているうちに、査読者に近い他の研究者に先を越された」といった (時々耳にする) 不可解な事象の抑止効果が期待できる。また、プレプリント・サーバーで公開された研究の出版を認める雑誌も増えつつある。

このように、プレプリント・サーバーにおける研究者にとっての懸念事項の多くは解決されつつある。一方で、特に臨床医学分野では、社会に与える影響から、精査されていない臨床研究成果の公表には消極的であり、bioRxiv でも臨床研究は対象外としている。しかし、今年の 6 月には臨床医学向けのプレプリント・サーバーである「medRxiv[4]」がサービスを開始した。medRxiv では、これまでの懸念に対応すべく、1) 倫理レビュー、臨床試験登録、患者の同意、資金源、利益相反情報を公開すること、2) ボランティア研究者や医学分野の編集者が正当性の確認をすること、3) 「査読を経ていないため、臨床診療に適用したり、確立された情報としてニュースメディアで報告しないこと」を明記する、といった対策がなされている。また、掲載された論文に倫理上の問題が発覚した場合は撤回する仕組みも設けている[5]。今後は、臨床医学分野でもプレプリント・サーバーの仕組みが徐々に普及していくことだろう。

オープンアクセス・オープンサイエンスが進展するにしたがって、「研究活動によってどのようなデータが生じることが想定され、生じたデータを誰がどのように管理し、どのようなポリシーで公開・非公開とするのか」を、研究の開始前に予め検討することが求められつつある。実際、AMED[6]や JST[7]などが公募する事業においては、研究の開始前にデータの管理計画 (Data Management Plan; DMP) を策定することが求められている。データの管理計画を予め定めておくことは、公募先による強制の有無とは関係なく、日々の研究活動を円滑に進めるためにも必要と思われる。DMP の作成を支援するツールである「DMPTool[8]」などを活用して、日々の研究活動に DMP の策定を組み入れてみてはいかがだろうか。

---

[1] http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/miyamoto/activity/view/582.html

[2] https://shiga-med.repo.nii.ac.jp/

[3] https://www.biorxiv.org/

[4] https://www.medrxiv.org/

[5] Jocelyn Kaiser, Medical preprint server debuts, *Science*, Jun. 5, 2019 , 7:00 PM, doi:10.1126/science.aay2933

[6] https://www.amed.go.jp/koubo/datamanagement.html

[7] https://www.jst.go.jp/all/about/houshin.html#houshin04

[8] https://dmptool.org/ 日本語などへの対応が計画されている

機関リポジトリ「びわ庫」とは

滋賀医科大学の学術研究成果や本学で作成された資料を電子的に保存し、学内外に無償で公開するインターネット上のデータベースです。附属図書館 Web サイトからアクセスできます。

本学の構成員の方ならどなたでも、自身の研究成果等を登録し、世界中に発信することができます。

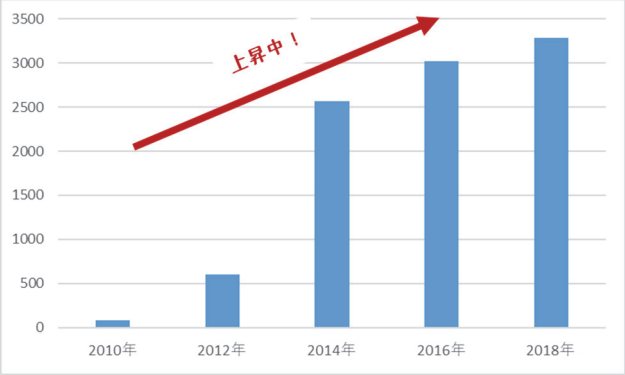
滋賀医科大学機関リポジトリ
びわ庫

https://shiga-med.repo.nii.ac.jp/

登録できるコンテンツ

本学で生産された成果物は何でも登録できます。

- 発表論文（学術雑誌論文、紀要論文）
- Supplemental Data
- 学位論文
- 科研費報告書
- 学会発表資料、ポスター発表資料
- 広報誌
- 教材、会議資料など…



登録件数の推移(2018 年度末時点)

コンテンツ登録方法

執筆された論文情報または登録したいコンテンツの電子ファイル（PDF 等）を下記のコンテンツ送付先までお送りください。研究成果が紙媒体の場合は図書館で電子化の上、登録します。

- 出版社版の登録可否は、各出版社のポリシーによって異なります。
- 出版社が著作権を保有していても、**著者最終稿が登録できる場合**があります。
- **著作権調査・公開の許諾確認等、出版社との調整は図書館で行います。**

著作権が譲渡されていない研究成果の場合は、執筆者本人の許諾によりリポジトリに登録することができます。（共著者がいる場合には共著者全員の同意が必要です。）

コンテンツ登録方法の詳細は、図書館Webサイトでも紹介しています。合わせてご参照ください。

http://www.shiga-med.ac.jp/library/support/biwako_toroku.html

コンテンツ送付先・問合先
附属図書館（情報課）学術企画係リポジトリ担当（内線:2079）
hqjoukan@belle.shiga-med.ac.jp

「びわ庫」登録のメリット

- オープンアクセスでない雑誌の論文も、条件によっては公開できるので、**世界の研究者**に論文を読んでもらえる。
- Google検索やその他検索エンジンでヒットする機会が増えるため、**引用回数の増加**が期待できる。
- 研究者として**説明責任を果たす**ことができる。
- 論文の**毎月のダウンロード回数が報告**されるので、視認性向上を実感できる。
- 論文公開後の**URIリンク切れの心配がない。**

2019.10 滋賀医科大学附属図書館